竹内明太郎の最後の挑戦

6 茨城無煙炭鉱

茨城無煙炭鉱は竹内綱が開削し竹内明太郎が炭区を拡大した竹内鉱業傘下の炭鉱で、常磐炭田南部地区最大の規模を有していました。無煙炭という煙の少ない上質な石炭が採炭され、東京や横浜など住宅密集地の工業で重宝されました。竹内農場の食糧を炭鉱労働者へ供給していました。

竹内綱の時代

明治 29（1896）年、三井財閥の団琢磨（だんたくま）の紹介で茨城県多賀郡華川村（はなかわ）小豆畑（おずはた）・芳の目地区 (現北茨城市華川町小豆畑) の山を竹内綱が入手しました。そして茨城炭鉱株式会社を設立し、竹内綱が社長をつとめ竹内鉱業株式会社の一事業として炭鉱を開削します。

明治 30（1897）年、日本鉄道磐城線（現 JR 東日本常磐線）磯原停車場（磯原駅）の開業と同時に、小豆畑～磯原停車場間に馬車軽便鉄道の免許を取得し、間もなく線路を敷設します。

明治 34（1901）年には茨城無煙炭鉱株式会社に改組、本社は東京市京橋区明石町 11 番地に置きました。明治 36（1903）年、芳の目地区に火力発電所を建設し、常磐炭田初となる電力による操業が行われました。

竹内明太郎の時代

明治 44（1911）年竹内明太郎が社長に就任し事業を拡大します。小豆畑・芳の目地区を第一鉱区とし、新たに石岡地区（現北茨城市中郷町石岡）に第二鉱区を開削、日棚（ひたな）地区（現北茨城市中郷町日棚）に第三鉱区を開削しました。大正 6（1917）年、第二鉱区と第三鉱区及び常磐線南中郷駅は曳索（えいさく）軌道（ロープで貨車を引っ張る軌道）で結ばれました。

炭区の規模は、第一鉱区 1,158,710 坪、第二鉱区 707,322 坪、第三鉱区 480,000 坪で、その他試験鉱区 974,335 坪があり、常磐炭田南部（茨城県）で最大規模を有していました。

所員（事務員 97 名、技術員 70 名）、鉱夫（坑内夫 1,300 名、坑外夫 410 名、職工 140 名）計 2,017 名で、家族を含めると 4,000 名を超える大所帯となり、ひとつの町を形成していました。

鉱産量は、明太郎が社長就任時の明治 44 年には 125,000,000 斤（きん）（75,000 トン）、その後とんとん拍子に上昇し、ピークは大正 3（1914）年 350,000,000 斤（210,000 トン）で、その後年々減少します。

炭質と販路

無煙炭は、燃焼に際して煤煙（ばいえん）及び臭気が少なく、薪材木炭の代用品として広く需要がありました。但し、茨城無煙炭鉱所有の全ての炭区で無煙炭が採炭されたわけではありません。地元の方から聞いた話によると、中郷（第二鉱および第三鉱）では無煙炭が採炭されていなかったそうです。無煙炭は日本国内での産出量が極めて少なく、第一鉱（華川小豆畑地区）においても割合がさほど多かったとは思えません。希少だからこそ、無煙炭の採炭は茨城無煙炭鉱の特長であり最大の売り商品であったことを社名が示しています。

無煙炭の取引先は製糸業、製菓業者、酒・味噌・醤油等の醸造業者、飴・菓子・砂糖等の製造業者、湯屋・理髪店・料理店その他一般家庭におけるストーブ・風呂・炊事用が主で、汽罐（ボイラー）に使用される場合もありました。住宅密集地の工場では煤煙が飛び散らないので重宝され需要が増えたそうです。

販売先は東京、横浜などの関東一円、さらに西は大阪・京都、北は秋田・山形に至るまで、30 府県に顧客がありました。付近の同業者との価格維持のため、茨城採炭株式会社及び山口無煙炭鉱合資会社と協同で茨城無

煙炭共同販売所を設置し、販売の一切を委託して好成績を上げました。

従業員への手厚い待遇

竹内明太郎は炭鉱を視察する時、坑夫に対してもきちんと帽子を取ってお辞儀をしたといい、彼の炭鉱従業員に対する敬愛の気持ちが伝わって来ます。そのような明太郎が経営する茨城無煙炭鉱では、住居、健康管理、娯楽施設の設置、表彰の制度など従業員の待遇が極めて優れていました。

住居に関しては、ランプ生活が当たり前の時代、勤務２年以上の妻帯者には電灯が付いた住宅を無償で提供し、共同浴場まで設けてありました。また独身者に対しても電灯が付いた合宿所（寮）を設け低価格で貸し与えました。日々の生活支援として、各鉱には従業員が気軽に日用品を買えるよう用度部（購買部）がありました。用度部は一時に大量仕入れをし、卸値段で販売し、また米価が高騰した時は会社で差額を負担して安定的に低価格で提供しました。用度部の販売方法は手持ち金がなくても支障がないように、給料天引きの掛け売りも行っていました。竹内農場で栽培された農作物は常磐線で運ばれて用度部に持ち込まれ、食糧の安定供給の役割を担っていたと考えられます。

健康管理面では、各鉱に会社専属の病院（診療所）を設置し、数名の医師のほか看護婦（看護師）等を配属して患者の診療を行いました。料金は取らず、僅（わず）かな薬代の負担だけで気軽に診察を受けることが出来ました。薬代も日用品同様に給料天引きが出来ました。

娯楽面では飲酒、賭博等の悪習慣を止め、鉱員を善良な習慣へと導くよう、各鉱に図書室・ビリヤード・テニス・蓄音機・碁・将棋・剣術等の施設を設け気軽に利用出来るようにしました。また、遠足や談話会、寄席、活動写真会（映画会）を開催し、家族と共に楽しく過ごせるように配慮しました。毎年春季あるいは秋季に山神の祭典を行い、正月及び盆は２～３日の休養日を設け、芝居、曲芸などの余興を催しました。

当時は、資本家が労働者を搾取するのが当たり前と考えられていて、どこも過酷な労働環境でしたが、茨城無煙炭鉱はこのように異例づくしだったのです。

写真１　今も残る茨城無煙炭鉱第三鉱の遺構（茨城県北茨城市）

茨城無煙炭鉱の終焉

明太郎は炭鉱に変わる地場産業を興すため、茨城無煙炭鉱の付属施設として、唐津鐵工所や小松鉄工所と同規模の鉄工所の創設を計画します。そのため、常磐線南中郷駅前に３千余坪の敷地を買収し、大正８(1919)年５月に南中郷鉄工所の起工のため地鎮祭を執り行いました。しかし、大正９（1920）年以降の不況の中で、この工事がどの程度まで進んだか定かではありません。

企業の利益よりも従業員の厚遇を優先した茨城無煙炭鉱は、第一次大戦後の長引く不況を耐え抜くだけの体力がありませんでした。石炭の売り上げが激減し、大正 14（1925）年に廃業となります。翌年、全ての鉱区と施設は大倉鉱業に譲渡され、以後大倉鉱業無煙炭鉱となりました。

しかし、間もなく大倉鉱業自体が経営不振に陥り、第一鉱（華川小豆畑地区）を休止（後に廃鉱）し、二鉱（中郷石岡地区）と三鉱（中郷日棚地区）を統合し中郷鉱としました。昭和９（1934）年、大倉鉱業無煙炭鉱は入山採炭に譲渡され、入山採炭中郷鉱となりました。その後、幾多の変遷を経て、中郷鉱は茨城県で唯一の炭鉱となりましたが、昭和 46（1971）年、突然襲った水没事故によりあっけなく閉山となりました。

茨城無煙炭鉱の遺構を訪ねて

閉山から約半世紀が経過した令和２（2020）年１月 20 日、茨城無煙炭鉱の遺構を探して北茨城市を訪れました。

最初に訪れたのは中郷鉱跡（北茨城市中郷町日棚）です。炭鉱そのものの遺構は見られませんが、小高い山の麓（ふもと）に選炭所等の関連施設が廃墟と化していました（**左ページ写真 1**）。地元の方々に伺うと、これらは戦前からの施設で、小高い山はボタ山（石炭生産の際に出る捨石の集積場）の跡ということが分かりました。中郷鉱近くには「三砿」というバス停がありました。これは茨城無煙炭鉱時代にこの地に存在した「三鉱」という炭区名が親しまれ長年定着しているようです。往時の炭鉱と住民の密接な関係がうかがわれます。

中郷鉱跡の近くに旧十石隧道（ずいどう）（**写真 2**）という史跡があります。これは大正６（1917）年に茨城無煙炭鉱第二鉱と同第三鉱を結ぶために敷設された曳索軌道のトンネルです。曳索軌道で第二鉱から第三鉱に運ばれた石炭は、ここから同年に敷設された第三鉱専用曳索軌道により、第三鉱で採炭された石炭とともに南中郷停車場まで運ばれたそうです。

次に、明治 44（1911）年敷設の第二鉱と南中郷村大塚（現北茨城市磯原町大塚）を結ぶ曳索軌道の痕跡を探してみました。この路線は、第二鉱で採炭された石炭を南中郷村大塚まで運び、ここで山口炭鉱専用線に積み替え磯原停車場へと運ぶための第二鉱専用線でした。前述の第二鉱と第三鉱を結ぶ曳索軌道が開通したため廃線になったそうです。現在も、磯原町大塚及び隣接の木皿地区には山口炭鉱専用線の枕木と鉄橋跡（**写真 3**）及び重内炭鉱専用線のレールが確認出来ます。しかし、廃線時期が早かった茨城無煙炭鉱の軌道はレールの痕跡すらありません。太平洋戦争時の金属類回収令によって国に供出されたのかもしれません。

最後に、茨城無煙炭鉱の原点、竹内綱が開削した第一鉱があった華川町小豆畑地区（**写真 5**）を訪ねました。かつて賑わった華川の街並みに、今は炭鉱町の面影すらありません（**写真 4**）。地元の人に尋ねてみましたが、ここに炭鉱があったことさえ知らない人が多いようです。大正 14（1925）年、大倉鉱業への売却後まもなく閉山したため、人々の記憶からも地域の歴史からも消え去ってしまったようです。唯一、炭鉱らしさを感じた場所は、華川小学校近くの石炭層の断層でした。

写真 2（左上）曳索鉄道の遺構、旧十石隧道。3（右上）旧山口炭鉱専用線の鉄橋跡。　4（右下）かつての炭鉱町北茨城市華川町のまち並。5（左下）かつて第一鉱があった北茨城市華川町小豆畑地区。